校友時報

昭和47年3月1日
編集人兼發行所
秋田県能代市追分町4番26号
秋田県立能代高等学校新聞部
印刷所 大勝堂印刷所

主張

生徒会不振と執行部への提言

「能高生徒会は危機に瀕している。」と言っても今始まったことではない。数年前からさかんに議論され、その打破が執行部の課題だったのである。その中での今年度の生徒会活動を考えてみることにしよう。

まず昨年の十月まで会長をつとめた山須田君、ワンマンだと言われながらも少しでも能高生徒会をマンネリ化から脱皮させようとした努力は能高祭などにうかがわれ、評価できよう。その反面、それが一人がりになり、ますます執行部と一般生徒の間のギャップを大きくしたことについては否定できない。それは「百円強制徴収」などで明かである。生徒の声を無視した行動はたとえどんなことであろうと民主主義のルールでは否定されねばならない。こんな生徒会不振の中で生徒会を活発にし、執行部と一般生徒のギャップを少しでも緩和しようと名のり出たのが現会長の石塚君である。彼だれもが知っているように、手初めとして同好会規約の作成や生徒会々則の改正にあたった。しかし、これも生徒相互の連絡の不十分などからすんなりいかなかった。彼らは彼らなりに一生懸命やったに違いない。しかし、そうなった原因が三無主義のため（事実、その通りなんだが）などと片付けてはこの失敗がなんの意味も持たなくなる。三無主義の根本をなすものを考えなければならないようだからと言って生徒会が不振であるという理屈は成り立たない。いくら「退廃」「受験――」であっても生徒会は活発にできるはずである。今現在、執行部は生徒全体の生徒会として活動しているとみられる。これは生徒がある程度関心を示した時点でなら効果があったと思う。しかし現時点、つまり三無主義が浸透しきった今日では効果がないことは明かである。また「生徒全体の――」となってくると教師の介入も必然としてくると思われる。

これからは、生徒一人一人の生徒会として存在することが必須なのではなかろうか。つまり、生徒一人一人の意見、世論を随時聞き入れる耳を持つということなのである。執行部や企画部からはよく生徒が努力しないからだめなのだ、という声を聞くがこんなことではらちがあかない。協力しないのも悪いが、協力させるためにはうちすべきか、と一歩ゆずった考え方の在り方ではないだろうか。

石塚会長の努力もうかがえるが、前述したことも考えて活動して欲しいものである。

新聞部々長　畠山勝巳

卒業生諸君に一言

生き甲斐のある生涯を

学校長　和田勝太郎

尺取虫は、前進のためには、あえて己が身を屈して常にその速度と歩巾を変えないと言われ、障壁に行き当ったときの慎重さは、また無類ともいわれる。

それぞれにベストを尽くして欲しい。

ドイツの詩人であり、劇作家でもあるメーテリンクが、「人生は一巻の書なり」と述べておられるが、諸君は、その一頁一頁を丹念に書きつづって、あまり汚さないように心がけてもらいたいと同時に、慎重にしかも勇気をもって、骨太くたくましく書かれることを祈ってやまない。

それと、是非考えてほしいと願うことは、自己を中心としたものの考え方でなく、「社会のしがらみは、皆のもの」ということである。

例えば、あの観光地と称せられる場所を見たまえ、どこもかもゴミの山、自然を求めるは人間共通なはずなのに、このような現象がみられるということは、われわれが、日常のなかに自然を求める心を失い、自分中心に行動している所産にほかならない。

また「自然への脱出」などという、甘い言葉もきかれるが、ゴミを捨てない心が育たぬ限りは、自然本来の姿を見出すことは、不可能なはずである。

この、ゴミを捨てない心が育った暁にこそ、諸君は男らしい立派な紳士として、人々からもっとも迎えられるであろう。

何も、色々の学歴をつけたり人並すぐれた腕力があるからではないだろう。

この世の中には、君たちの若い歓心を買うようなものが、うようよしている。決して心のひもをゆるめてはならぬ。只々自己の全力をあげて、生き甲斐のある生涯に、取組んでほしい。

屈することは、次への飛躍を意味するもので、少々の失敗に、くじけてはなるまい。

吾々人間の、人生への歩みも、けだしかくありたきもの。

さて、卒業生諸君のうち、その約八十四%が大学進学で、のこり十六%が就職または家事のようであるが、そのいずれの道を選んだにしても、ひとしく

三年間は短し、されど長し

前生徒会長　山須田武光

長いようで短い三年間でした。昭和四十四年四月、胸をはずませてあのプラタナスが並ぶ坂道を登って行ったのが昨日のことのようです。

ぼくはこの三年間で二度と体験できないことをいろいろと経験しました。まず一年から三年までの間に一つのことについて、いろいろな考え方をする人、行動する人に出合ったということです。それも人間として成長する間に……。

次にいろんなことを自分自身の目でたしかめたということです。生徒会長となり、いかに能高生はすばらしく、そしてまた、バカであるということの二つの面を持っているということを知りました。それは言う方が悪いかもしれないけど、つまり、考えたはとてもすばらしく行動がない、ということです。ぼく自身それに従ったのですからよくわかりました。

自分自身を一年の時、二年の時三年の時と三つに分けてみると、ちっとも変わらないと思ってもちょっぴり進歩していました。一つは、自分を反省することが完全できたこと、そして一つには群集の中で一個の考えを通す態度ができたことです。これでいいのだと思います。

三年間は短く、しかし長かったと思います。今は三年間の感慨にふけっています。

卒業式準備

暖冬と言われた冬も終り、暖かい春の日ざしが差し込もうという今日この頃、例年のごとく受験や卒業式準備などであわただしくなってくる。そういうさなかで本校の第二十四期生の卒業式が本日午前十時より体育館で挙行される。毎年のことではあるが、大学入試と重なり出席者はだいぶ少なくなりそうである。

卒業式の次第は例年と変わりなく、四十五年度に大幅に簡略化されて以来、ほとんど変化はない。

今年度も多難の年であった。不幸なバイク事故などは続くし、また、生徒会活動は依然として生徒と執行部との意志疎通がみられなかった。生徒会費も赤字を増し、十月の百円強制徴収にまで至った。

グラブ方面でも昨年よりは活気がみられたものの、数年来の低迷から抜けだすことができなかった。反対に、文化活動はますます活発化している現状である。

これから、大学生活にはいるもの、社会に出るものとその道は異なるが今までの三年間の努力や経験を生かして頑張ることを期待する。またいろいろと言われている高校生活三年間、無選択無欠課の皆勤者には敬意を表したい。

皆勤受賞者（十七名）

三A　梅田　実
三B　柴田英樹、瀬川　高与素敬吾
三C　近藤吉洋、平川孝信
三D　菊地雄三、菊池俊三
山崎義夫
三E　荒谷田一郎、浜松桂治
三F　工藤雅信、近藤義人
長門一輝
三G　大山英朗、工藤俊一

卒業式々順

一、修礼
一、開式の辞
一、「君が代」
一、卒業証書授与
一、賞状授与
一、式辞
一、祝辞
一、送辞
一、答辞
一、唱歌
一、校歌
一、閉式の辞
一、修礼

祝辞

卒業生のみなさん、おめでとうございます。

高等学校の学業を終えるにあたって、みなさんの胸中には学校生活の思い出や将来への希望などが交錯していることと思います。

今、みなさんは、広大な夢や希望の中から自分のものとして一つの道を選択し、それに向かって勇敢に第一歩を踏み出そうとしています。自分の道は自分で発見しなければなりませんし、それを発見するためには、たいへんな努力も必要です。しかし、目ごろ抱いていた無限の夢の中から、自分の道を選択する自由と責任は青春の特権でもあるのです。

現代は大衆社会、あるいは情報化社会といわれ、ともすればそうした情報や大衆の中に自己を埋没してしまいがちですが、みなさんは決して自己の道を見失うことなく、選択した自己の道を歩み続けてほしいものです。あるいは、今後もそれを模索するための道程が続き、時には苦難や迷いに出会うことがあるかも知れませんが、その時こそ、高校生活で身につけた深い英知と友情とが大きな支えとなってくれるものと思います。

また、この変化してやまない社会にあって、自分の道を貫き充実した人生を過ごすためには今後とも、生涯にわたって学び続ける態度を失ってはなりません。この激しい社会の変動に対処するためにも、また、自己をより向上させるためにも、あらゆる機会をとらえて学び続けることがたいせつです。

みなさんは、これからも常に新鮮な知識を吸収し、広い視野にたってあすの新しい文化と価値を若い力で創造していただきたいと思います。卒業の日をそのために新しい決意の日にしてくださることを期待してお祝いのことばとします。

昭和四十七年三月一日
秋田県教育委員会

巨濤発行される

二学期から進められていた巨濤十四号の編集が終り、一月九日に全校生徒に配布された。

内容面では昨年（十二号）以前からマンネリしつつあった巨濤だが、この十四号は伊藤信吉、渡辺博史の両氏の文化講演の内容や二年生の倫社のレポートなども収録されており、以前にない新鮮さが感じられた。

しかし、その編集課程をみると各HRの編集委員（庶務委員）が本来、編集にあたるのだが、十四号はすべて企画部員の手で進められたのである。こんなところにも無関心さがみられる。

ともはあれ、企画部員の努力に敬意を表したい。

本当にご苦労さんでした。

ぞうきんおくられる

去る一月二十一日、二〇の菊池忠夫君より、ぞうきん五〇枚が本校に寄付された。菊池君のおばあさんが亡くなられたのにともない、菊池君のおばあさんが生前より余暇をみて本校に寄付しようとして作っていたぞうきんだそうである。ぞうきんはさっそく、各クラスに一、二枚と各先生の机・かき用として配られた。各クラスに配られたぞうきんは黒板のこた取り用として用いられる。

「人間の真心がこもっているのでもあり、だいじに使ってもらいたい」と保健係では言っている。

点

▼春――。新一年生がプラタナスの並木をくぐり、心をはずませながら初登校。第一印象は古ぼけた校舎。はずんでいた心も半減。これから約一年、隣りの鉄筋四階がうらやましい。グランドの桜が美しい頃である。▼夏――。白いワイシャツが校舎をうめ、昼休みや放課後、緑のなかではギターの音やバレーボールの掛け声が絶えない。体育の後のシャワー。これまた気持がいい。▼秋――。初秋の満月をみあげながら月明の中を走破する土曜徒歩。足の痛さがなにもかも忘れさせる。一段落つくと、放課後とかからとなってトンソンとカナヅチの音が聞こえはじめる。能高祭の準備である。高校生活の思い出のほとんどがこれを源とする。▼冬――。超冷房の教室でブルブル体をふるわせながら勉強、ストーブの側の者は先生の話を子守り唄にウトウトト――。そして座ブトンが宙に舞う手錢会。▼これがわが能高の一年である。しかし、この内のいくつかは新校舎建設とともに消えてしまう。これも「時の流れ」として片付けられるのだろうか。この校舎を愛する我々にとっては真に寂しいことである。▼新校舎は、鉄筋四階、金龍暖房、体育館と講堂が一つずつ、また外にはサッカー、陸上競技用の運動場と硬、軟式野球用の運動場が一つずつ、それにテニスコートが四面とプール……といった超近代的な学校になるわけである。▼そうなるとも、すりへった階段の手すりや能中時代のなごりである「能中ガラス」が見られなくなる。そこで提案だが、それらがみられるように新校舎に現在の校舎の遺品を展示する所を作ってはうどろうか。我々が卒業して母校を訪れる時などそこでなつかしい昔を顧みることができたら、どんなにうれしいだろうか。「温故知新」という格言もあることだし……。決められた字数というものがあるだろうが、こんな思いも気を配っていいのではないだろうか。

学生のみせ
キムラヤ
畠町
2-5535

進学の準備に
参考書・問題集を
一長堂書店
畠町 T 2－4141

2分間・写真
カメラの10ヵ月払い
第一商店会チケット
つサオカメラ
能代・畠町・坂上 TEL (2) 5703
支店 カメラのさくら堂
能代市柳町11－27
TEL (2) 6039

メガネの カモヤ
畠町 T 2－3740